

特集

「オンナ」と「わたし」のはざままで

コラム

小説家

蛭田 亜紗子 さん



り
ぶ
る

さ
っ
ぽ
ろ

夏

36

2014 Vol.

「オンナ」と「わたし」のはざままで

ー女性という性は、わたしたちのもの

私が高校生だった九十年代の半ば、世間では「女子高生ブーム」が巻き起こっていた。ルーズソックスやら茶髪やら果ては援助交際だとか、メディアは女子高生カルチャーに注目し、その生態を扇情的に取り上げた。「制服を着ていられる期間にしか価値がないから、いまのうちに遊ばないと」。テレビの街頭インタビューでそう語る渋谷の派手で大人っぽい「コギャル」の子を、札幌の地味な女子高生だった私は「そういうものなんだろうか」と疑問に思いながら眺めていた。

渋谷の彼女が言っていた「価値」とは、だから見た「価値」なのだろう。おそらく他者から見た「価値」、それも大人の男性視線での「価値」だったんじゃないか。もっと前の時代には、女子大生ブームやOLブームなんというのもあった。これらだけで女子大生やOLが自らブームを名乗ったのではなく、どこかのおじさんが提唱したのだろう。

婚活に精を出している友人によれば、結婚相談所に登録する際、二十九歳と三十歳ではランクが異なり、男性からの反響も雲泥の差らしい。「熟女好き」を自称する男性の話聞いてみると、彼のいう「熟女」は三十代を指してずっとさけることもある。しかもその彼自身が三十代だったりするのだ。同年代

や少し年上を好むというごくごくノーマルな趣味を、「熟女が好き」なちよつと変わった俺」としてアピール材料にするなんて！

男性から見た性的対象としての「オンナ」と、女体を持つて生まれて毎日を過ごしている実際の「オンナ」。多くの女性はそのギャップに戸惑った経験があるのではないか。女性が日常において確実に自分の性を意識するのは、毎月の月経だろう。月経の影響下にあるのは月に七日程度の生理期間だけではない。生理が近づく、ひとによってはわけもなく涙が出てしまったり、情緒不安定になる。せつかく順調にダイエットが進んでいてもどかんと体重が戻ったり、顔に吹き出物が出たりして、ブルーな気分追い打ちをかけられる。こういう色づきが皆無な事柄だって、女性の性の一面だ。

妊娠や出産といった、性が肉体と人生に大きな変化をもたらす現象はもちろんのこと、やがてやってくる更年期もからだやこころを揺さぶる。更年期を乗り切っても、女性ホルモンの減少により骨密度が低下したりと、女性の肉体特有の悩みは尽きない。

第二次性徴のはじまりからそれこそ死ぬまで、性は一生にわたって女性に深くかかわってくる。だから女性は、みんな性の

エキスパートであるはずだ。それなのに、ちまたにあふれる「女性の性」「女性のからだ」は、男性の欲望によつて切り取られた、女性から見るといびつで非現実的に思えるものが目立つ。踏みこじられている、と感じるようなものも少なくない。

私は「女による女のためのR-18文学賞」という、女性が性をテーマに書いた小説を対象とした賞（現在は性という枠組みを外して、より幅広い小説を募集する賞になっている）を受賞して小説家デビューした。官能色の強い作品を書くこともあるけれど、男性目線でのファンタジーめいた性愛の話とは違う、女性に自分自身の話として受け取ってもらえるような小説を心がけている。

いま、私は三十代の半ばにさしかかるところで、既婚者だ。子どもはいない。「このトシで脚を出すのはみつともないから」とショートパンツの購入を見送るときや、札幌駅周辺のファッションビルを闊歩している二十歳前後の女の子たちを「若くてかわいくていいねえ」と眺めるとき、すっかりご隠居の気分だ。

異常があったらどうしようと緊張しながら乳がんや子宮がんの検診を受けるとき、自分の性を疎ましく感じる。生理周期のせいでダイエットの計画が崩れるたび、女性ホルモンを憎たらしく思う。もう自分の人生に、性は必要ないんじゃないかと考えることもある。

だけど本来、性は生涯を通じてさまざまなる喜びをもたらしてくれるものであるはずだ。生理に煩わされるだけではもつたない。産むひとと産まないひとと、若いひととそれほど若くないひとと、自身の性を愛し慈しんで、愉しむことができたいと思う。

女性の性は、それを欲するだけかのために独立して存在しているのではない。人生や生活やこころと切り離すことのできない、私たちの大切な一部分。女性という性はほかでもない私たちのものだから、だれかの顔色を窺うことなく、自分の気持ちのままに進めばいい。



小説家

蛭田 亜紗子

1979年、北海道札幌市生まれ。広告会社勤務を経て、2008年に新潮社「第7回女による女のためのR-18文学賞」大賞受賞。受賞作を含む短編小説集『自縄自縛の私』でデビュー。この作品は2013年に竹中直人監督で映画化された。ほかの作品に『星とモノサシ』『人肌ショコラリキュール』『愛を振り込む』がある。現在、札幌市在住。

座談会

“オンナ”と“わたし”のはざまで

札幌で当たり前生活し、当たり前働く女性たちの声を聴いてみたいと思い、座談会を開催しました。彼女たちの思いから、共感や新鮮な気づきがあるかもしれません。どうぞ札幌の女性たちの座談会をお楽しみください。



ゆきさん



まきさん



なつさん



みおさん

—今日の座談会のテーマは「オンナ」と「わたし」のはざまで、ということですが、皆さんは「オンナ」と「わたし」の間での揺らぎや違和感を経験されたことはありますか？

なつさん…つい先日経験したばかりです。

引越しを考えていて、不動産屋さんにとりする中でちよつとしたトラブルがあったんですね。それで賃貸に関する相談窓口で、電話で相談したんですよ。そしたら窓口の方がいろいろとアドバイスをくれて。そこまではいいんですが、いきなり、「旦那、何て言ってるの？」って聴かれました。「旦那なんて夫とかのことですか？いないんですけど」といったら、「ああ、あんた女だからなめられてるんだわ」って言われて。すごく衝撃だったんですよ。

私、今年40歳になるんですけど、声を聴いて、40代の中年の女だから、こちらからは一言も言わなくても、「旦那」がいて当たり前だと思つたみたいなんです。女性に對する「旦那ないで当たり前前感」とか、「彼氏いて当たり前前感」とか、お母さんいたら「お母さんで当たり前前感」とか押しつけられることは多いと思います。自分じゃないものを看板につけられている感覚がとっても違和感のある経験でした。

みおさん…私は2年前に離婚をしたので、最近よく感じるのは「シングルマザー」に對するイメージでしょうか。例えば独身グループで恋愛話をしている時に仲間に入れてもらえなかつたりする時の微妙な空気感というのかな（笑）。私個人に興味がなくて聞いてこないのか？それとも「気の毒だから触れないでおこう」と気を遣われているのか？それとも「シングルマザーは子ども

一筋で生きる人＝恋愛をしない人」と思われているのでは？なんて考えてしまうことがありますね。実際この間「彼氏と別れたよ」という話をふと会社の同僚にしてみたのですが、すごく驚いた反応をされたのが印象的でした。

やっぱり「シングルマザー」とか「離婚」とか、文字を見ただけで何だか怖くないですか？マスクミでの取り扱われ方も、離婚するとお金がなくて大変、子どもは保育園に預けて朝から晩まで必死で仕事をして、必死に節約して女手ひとつで育てるのが愛情。そういう報道のされ方を見ると、なんとなくそこには楽しさとかバカバカしさとか恋愛してデートする、みたいなイメージが入り込む余地が少ない気がして、なんとなしに自分らしくいられないような窮屈感を感じる場面は多いです。

ゆきさん…私自身が、違和感を感じるのは「女子力」という言葉です。飲み会とか、男性と一緒にいる場面で女子力が求められる。サラダを取り分けるとか、飲みものをみんなの分頼んだり、お酌しなくちゃいけないとか。それから、服装や格好などに関して男性から見えてかわいらしいものを押し付けられている感覚が、「女子力」と聞くたびにする。

私自身は女子力や周りの目を気にせず好きな格好をしたいのには、あなたはちよつとふわつとしていられるから中身もふわつとしてるんじゃないのかわられる。実際の私は結構サバサバしてるので、それにギャップを感じて、男の人がかえってひいた顔をする。見た目やイメージだけで勝手に自分の中身を決められてしまうのに違和感を感じます。



まきこさん…「オンナ」と「わたし」のあいだの違和感は常に毎日ありますね。

今年の秋に弟が結婚するんですけど、また結婚か、とって。私はLGBTの当事者なんですけど、私たちには結婚という当たり前の選択肢はないので、それで地元に行くかと親戚は「お前結婚しないのか」「次はお前だな」と言われて、「それは絶対ないんだけどね」とって思いながらも苦笑いして過ごすのが苦痛。親のことを考えると、親はずっとそこで生活しなきゃいけないので言えないっていうのもあるし、いろんな人の気持ちを考えなきゃいけないんですよ。会社で働いていたときも「彼氏はいるの？」って言われて、彼氏じゃなくて彼女なんだけどね、って思っ、でも言えない。常に常に女を求められるっていうのがストレス。

※LGBT：L（女性同性愛者）、G（男性同性愛者）、B（両性愛者）、T（トランスジェンダー）生まれたときの法的（生物学的）・社会的性別とは一致しない、または囚われない生き方を選ぶ人などの総称。

「オンナらしくしなければ」というプレッシャーを感じながらも、皆さんは自分らしい生き方を模索されているんですね。

みおさん…私は以前いわゆる「女性的なもの」への嫌悪感が強く、スカートがはけない子どもでした。今ではパンツもスカートも好きですが、どんな女性も、いつからでも、自分らしく生きやすくなれたらと思います。それを体現できたらいいなと、そんなふうに住事やら恋愛やらしているところはあります。それが私の使命！くらいに鼻息を荒くする日もあれば、そんなこと絶対に無理。いつそ消えてしまいたい…まで落ち込む日もあります。特に毎月生理前には律儀に落ち込みますし、自分でも自覚しますが、本当に揺らぎやすいというか、強さと弱さが同居した人間なんです。こんな揺らぎやすい自分ですが、トライ&エラーを重ねながら、少しずつ自分らしく生きられるようになってきているとは思います。

まきこさん…私は地元が保守的というか、女はこうあるべき、男はこうあるべき、とかがすごく古いですね。母親にも大学に行ったら女はお嫁にいけない、ということを常々言われてきたのでこれが普通だと思って暮らしてきて、でも家を出たら、ちよつと違うみたいって気づいた。それで札幌にきた3年前に親にLGBTであることをカミングアウトしました。それまではカミングアウトできる状況ではなかった。私自身が、自信がない、自尊心が低い、誇れるものがない、もし何か言われたらどうしよう、というのがあったんです。昔の自分に比べたら自分らしさ、個性が出てきたのかなって思います。

普通であれば10代、20代で経験すること、私はやつと30代になって経験しました。LGBTは恋愛とかもつまずいてくるので、そういうことも遅く、自尊心も下がってくる。生きづら過ぎて自分のことが考えられないですよ。やつと最近、自分のこととか将来のこと、こうなりたい、とか考えられるようになりました。

ゆきさん…女性はこのようにものであるべきという周りが持っている女性像と、自分は違うということを感じるようになってしまいました。それを周りのみんなもちゃんと理解して、受け入れてくれる。違う同士で集まって協力し合える関係ができたらいいなと思います。いつまでも、こうあるべき姿にとらわれていると、本当に自分のやりたいこととか、自分のなりたいたい姿から離れてしまう。だから、自分らしく主張することは難しいけれど、私は主張できるようになりたい。

みおさん…自尊心のお話は他人事ではないですね。私も自尊心が低すぎて、自分が好きな人が自分のことを好きになるわけがないと思いついて、その前提で生きてきました。離婚後に縁のあった男性とはおつき合いもしてきましたが、その過程で「そもそも私は高校生くらいからそういう根本の恋愛観がほとんど成長してないんじゃないか？」と気づいて愕然としてしまっ。でも愕然としていただけでは何も変わらないので、誰かを好きになることがあれば、絶対に自分から告白しよう！という目標を2014年の始めに立てて、偶然素敵な人に出会ったので告白してしまいました。

結果は、すごく温かい玉碎(笑)素敵な人に会えて、告白ができたことにとっても満足感がありました。

独身時代から恋愛はそれなりにしてきたつもりだったけれど、自分から選んでいいなんて思えなかった。他人からの評価で自分を測る癖がつくと、相手に依存したり振り回されたりしやすくなってしまふ。誰よりも自分が自分を信じていなかったことが、結果として元夫との離婚を招いたと思います。そういう意味でのやり直し、生き直しを今まさにしている感じですね。私のように突然告白して相手を驚かせるまでしなくても、毎日の小さなことから、人生を自分で選びとる練習はいつからでも始められると思います。

まきこさん..お二人の言っている部分に共感を得ることはばかり。人から見られる自分で生活してきたので、自分のやりたいことはいつも後回しだった。これからは自分のやりたいことをやっていきたい。黙っているのは良くない。言わないってことはいい、透明人間になることと同じなので、自分の意見を発することと同じなので、思いました。

—もっと自分らしく生きられるために、こんな社会になつたらいい、こんな仕組みがあればいい、という考えはありますか？

なつさん..男らしさ、女らしさっていうので苦しんでいるすべての人がもつとそれを言えるようになって、楽しく話できるようになったり同じ問題をいっしょに解決できるようになれたら、「わたしそれできる」じゃ

あ、それ頼む」ってなつたらいいと思うんですよね。

やっぱり子どもの問題、介護もそうだけど、子どもがいない人、LGBTなどさまざまな事情で子どもを持ってない人もそうだけれど、余つてる手があるから使つてちょうだい、どんどん活用してねって思います。

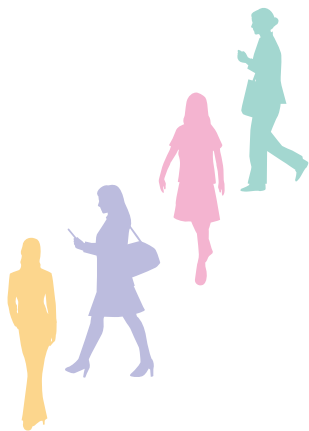
みおさん..手が余つてるから使つて、という言葉に共感しました。日本って本来とても豊かで足りている国ではないかな。なにに必要なものや情報なんかが必要な場所に相手に届いていなくて、なんとなしに無気力感が漂つて。恐らく世界中でそういう、すごくもつたいたい状態が生まれている気がします。

私は、毎年「バツイチ温泉」っていう企画をして出掛けていて、「バツイチだつて温泉に入りたいたいぞー」つてバツイチ友達と子どもたちと集まつて温泉へ行くだけなんですけどね(笑)ひとり親家庭で異性の子どもがいる場合、小学校に上がるくらいで一緒のお風呂に入れなくなると、温泉に行く楽しみが減つてしまいます。キャンプに行きたいって思つても、母親と子どもだけの世帯の場合、男手がないとテントを建てるのが大変、と二の足を踏むご家庭って多いのでは。でも何家庭かが集まれば助け合えるし、それこそ婚姻もセクシャリティもどのカテゴリにいても関係なく、男性と女性があつと協力関係を築けたらいいな。消費経済が縮小している中、自分の家庭だけ良ければいいのではなくて、もつと助け合つて生きていけたらいいなと強く思います。そしてそのパワーはすでにそれぞれ持っている気がしています。

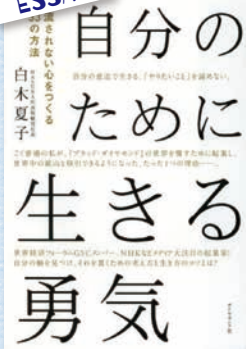
ゆきさん..お父さん、お母さん、子どもがいるつていう家族の形だけが幸せつていう概念じゃ収まりきれないほどいろんな家庭がもうすでにあると思うんですよ。幸せの形はひとつではないし、私たちも多様化するものを受け入れていかないといけないと思う。こうあるべきという形や姿にとらわれず自分のやりたいこと、自分がどんな人生を望んでいるのかをしっかりとつて、自分を幸せにするのも大切だと思います。

なつさん..人つて孤立していつてしまうと本当に良くないと思う。仲間がいるつていうことは本当にいいことだと思う。ジェンダーにこだわらなくても、そういう仲間いけない」をなくしてみると、そういう仲間つていてと思うなりつて。人つてもつと豊かになつていくんじゃないかと思う。

—皆さん、本日はありがとうございました。
男女共同参画社会を目指して、社会を変えていくための協働の仕組みを作るのが男女共同参画センターの役割ですが、皆さんお一人ひとりの想いや行動というのが社会を変える第一歩だと思いました。
こんな“想い”を共有できる場を今後もつくりていきたいと思ひます。



ESSAY



自分のために 生きる勇気

白木夏子 著

1,400円(税別) / ダイヤモンド社

著者は、人、社会、自然環境に配慮したエシカルジュエリーブランドである株式会社HASUNAの代表。「今の自分のままでいいのかな」「私らしさって一体なんだろう?」「自分らしく生きるってわがままじゃない?」「そう考える女性の皆さんに「自分らしく生きる」ための具体的な方法を教えてくださいます。

STORY



愛を振り込む

蛭田亜紗子 著

1,300円(税別) / 幻冬舎

朱のインクがついた1,000円札がつなぐ6人の女性の愛とお金と性にまつわる6つのストーリー。騙され、傷つけ、傷つけられ、…だけれど読んだあとに清々しい気持ちになる一冊。札幌駅や地下歩行空間、すすきのなど札幌のスポットが出てくると嬉しい気持ちになります。

RECIPE



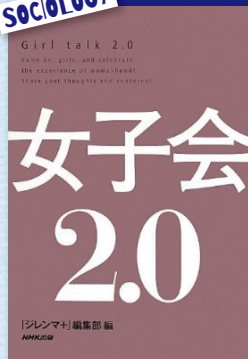
向田邦子の手料理

向田和子 著

1,600円(税別) / 講談社

女性の人生や家族のありようを描き、直木賞も受賞された向田邦子さん。実際の彼女は、料理や骨董や猫を愛し、丁寧な暮らしをしていたそうです。向田邦子さんの妹の向田和子さんが、姉の得意料理にレシピを再現した1冊。手早く簡単でおいしい料理を作りながら、向田邦子さんの生きかたに触れてみませんか?

SOCIOLOGY



女子会2.0

「ジレンマ+」編集部 編

1,300円(税別) / NHK出版

若手の女性論客らが「女子」の視点で、「女子」のこれからの生きかたを社会学的に論じる1冊。「磨きすぎた「女子力」はもはや妖刀である」という言葉に納得したり、「単身世帯女性の3人に一人が『貧困』である」という貧困女子問題に背筋が寒くなったり…、身近なジェンダーの問題を今の言葉でわかりやすく語ってくれます。


りぶるのススメ

このページではセンター職員がおススメする本をご紹介します。

あなたのお気に入りになれたら嬉しいです。

札幌エルプラザ情報センターを知っていますか?

札幌エルプラザ内にある「情報センター」では男女共同参画を含めた4分野の資料を閲覧したり借りたりすることができます(ご利用は無料です)。

 マークが付いているものは情報センターで借りることができますので、ぜひ遊びに来てください。

情報センターへのお問い合わせは

011-728-1223

(開館時間 9:00~20:00)
(貸出時間 9:00~19:45)



札幌市男女共同参画センター相談窓口のご案内

札幌市男女共同参画センターでは女性のための相談窓口を開設しています。
相談料は無料です。各相談では専門の相談員がお話をお伺いし、秘密は固く守ります。
1人で悩まずに、新たな一歩を踏み出すきっかけとしてお話ししてみませんか。

	女性のための 総合相談	女性のための 仕事の悩み相談	女性のための 法律相談	男性のための 悩み相談
日時	月○○○木○○土 10:00~12:00 ○火○○○○○ 15:00~17:00 ※ただし第2火のみ 18:00~20:00	○○○水○○○ 18:00~20:00 ○○○○○金 15:00~17:00	○○○○○金○ ※ただし第1・3・4 第3金 13:00~15:00 第1・4金 18:00~20:00	○○○水○○○ 18:00~20:00 ○○○○○土 13:00~15:00
相談員	カウンセラーなど(女性)	産業カウンセラー(女性)	弁護士(女性)	臨床心理士、産業カウンセラー(男性)
相談方法	面談／電話(011-728-1225)	面談／電話(011-728-1227)	面談	電話(011-728-1331)
相談内容	家族のこと、夫婦のこと、恋愛、対人関係など女性の総合的な相談に、相談員が面談または電話で対応します。	職場における対人関係、働き方、セクシュアル・ハラスメントなど、女性の仕事についての相談に産業カウンセラーが面談または電話で対応します。	離婚や相続など、法的な見解が必要な女性の相談に、弁護士が対応します。完全予約制なので事前にお電話でご予約ください。 予約受付電話:(011)-728-1255	誰にも打ち明けられず、男性であるがゆえに抱え込んでしまう悩みを男性相談員が電話で対応します。

女性の強みを生かし、支えあ
いの中で、仕事をする場です。
あなたの最初の一歩をお手伝い
します。

お問い合わせ
札幌市男女共同参画センター事業係
TEL: (011)728-1255
H P: <http://womenscowork.wix.com/co-working-lilaco>

自分らしい働き方を 始めてみませんか？

「オンナであること」と「わたしであること」
の間の違和感やプレッシャーについて、小説家
の蛭田さん、そして札幌に暮らす女性の皆さん
の思いをお伝えしました。女性や男性、それぞ
れに求められる役割は、時代の流れとともに変
わっていく部分があれば、いまだに根強く男女
を縛っている固定観念もあります。それでも、
座談会で皆さんがおっしゃっていたように、人
と人となりがり、お互いの違いを認め合い協
力しあうことができれば、札幌の街はもっと
もっと輝くことでしょう。皆さんはどう感じま
したか？

編集後記

発行月: 平成26年7月
発行: 札幌市男女共同参画センター
【指定管理者:公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会】
Facebook: <http://www.facebook.com/pages/札幌市男女共同参画センター/377759212234904>

所在地: 〒060-0808
札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ内
電話: (011)728-1255 FAX: (011)728-1229
ホームページ: <http://www.danjyo.sl-plaza.jp>



本誌のタイトル「りぶる」は、英語(ripple)で「さざ波」という意味です。男女共同参画の意識がさざ波のように、少しずつ広がって欲しいという想いを込めました。